

坪内祐三編集

edited by Yuzo Ishihara

明治の文学

第17卷

樋口一葉

一葉

坪内祐三『編集』
The Iwanami Institute

明治の

第17卷

樋口
二葉

图书馆
章

明治の文学
第17巻 樋口一葉

二〇〇〇年九月十五日 初版第一刷発行

編者 坪内祐三 中野翠

発行者 菊池明郎

発行所 筑摩書房

東京都台東区蔵前二五―三 千二一―八七五五

振替〇〇一六〇一八―四二二三

印刷 明和印刷株式会社

製本 株式会社積信堂

ISBN4-480-10157-8 C0393 Printed in Japan

乱丁・落丁本の場合は、左記宛に御送付下さい。
送料小社負担でお取り替えいたします。

※注文・お問い合わせも左記へお願いします。

千三三二―八五〇七 大宮市櫛引町二六〇四

筑摩書房サービスセンター

電話〇四八六五一―〇〇五三

目次

| | |
|-------|-----|
| 闇桜 | 3 |
| うもれ木 | 11 |
| 琴の音 | 42 |
| やみ夜 | 48 |
| 大つごもり | 82 |
| たけくらべ | 98 |
| ゆく雲 | 149 |
| うつせみ | 165 |

にごりえ……………180

十三夜……………217

わかれ道……………238

われから……………250

日記(抄)……………289

解説—素敵に俗っぽい—中野翠……………446

明治文学年表—坪内祐三……………456

樋口一葉年譜……………460

同時代人の回想—一葉の思ひ出—平田禿木……………464

明治の文学

第17卷

樋口一葉

全巻編集

坪内祐三

本巻編集・解説

中野翠

脚注

花崎真也・川岸絢子

脚注図版

林丈二・林節子

編集担当

松田哲夫（筑摩書房）

ブックデザイン

吉田篤弘・吉田浩美

閨桜

(上)

隔へだては中垣なかがきの建仁寺けんんにんじにゆづりて汲くみかはす庭井にはみの水みづの交まじはりの底そこきよく深く軒端のきばに咲うめく梅うめ一木ひときに両家りやうけの春はるを見みせて薫かほりも分わかち合あふ中村なかむら園田おんたと呼よぶ宿しゆくあり園田おんたの主人あるじは一昨年いっしやうしなくなりて相統りやうとうは良りやう之助のすけ廿二にじふにの若者わかしやう何某なにがし学校がくかうの通学生つうがくせいとかや中村なかむらのかたには娘むすめ只一人ただひとり男子おとこもありたれど早世さうせいしての一粒ひとつぶものとして寵愛ちゆうあいはいとゞ手てのうちの玉たまかざししの花はなに吹ふかぬ風かぜまづいとひて願ねがふはあし田鶴たづの齡としながゝれとにや千代ちよとなづけし

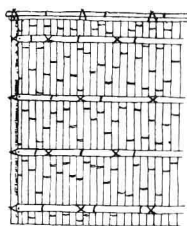


図1

(1) 中じきりの垣。
 (2) 建仁寺垣。割竹を平たく並べてしゆる縄なわで結むすんだ垣。

(3) 庭にある井戸。

(4) 家。

(5) ひとしお。

(6) いちばん大切たいせつにしている

物。

(7) 「かざしの花」は髪飾り。

少しの風にも当てないで。

(8) 「あし田鶴」は鶴の別称。

親心にぞ見ゆらんものよ梅檀の二葉三ツ四ツより行末さぞと世の人のほめものにせ
 し姿の花は雨さそふ弥生の山ほころび初めしつほみに眺めそはりて盛りはいつとま
 つの葉ごしの月いざよふといふも可愛らしき十六歳の高島田にかくるやさしきなま
 こ絞りくれないなゐは園生に植てもかくれなきもの中村のお嬢さんとあらぬ人にまでう
 はさゝるゝ美人もうるさきものぞかしさても習慣こそは可笑しけれ北風の空にいか
 のほりうならせて電信の柱邪魔くさかりし昔しは我も昔と思へど良之助お千代に向
 ふときはありし離遊びの心あらたまらず改まりし姿かたち氣にとめんとせねばとま
 りもせで良さん千代ちやんと他愛もなき談笑に果ては引き出す喧嘩の糸口最早来玉
 ふな何しに来んお前様こそこのいひじらけに見合さぬ顔も僅か二日目昨日は私が悪る
 かりし此後にはあんな様な我儘いひませぬ程におゆるし遊ばしてよとあどなくも詫びら
 れて流石にをかしく解けてはあらぬ春の氷イヤ僕こそが結局なり妹といふもの味
 しらねどあらば斯くまで愛らしき笑顔ゆたかに袖ひかへて良さん昨夕は嬉しき夢
 を見たりお前様が学校を卒業なされて何といふお役か知らず高帽子立派に黒ぬりの
 馬車にのりて西洋館へ入り給ふ所をといふ夢は逆夢ぞ馬車にでも曳かれはせぬかと
 おぼろむ
 大笑すれば美しき眉ひそめて氣になる事おつしやるよ今日の日曜は最早何処へもお
 出で遊ばすなと今の世の教育うけた身に似合しからぬ詞も真実大事に思へばなり
 此方に隔てなければ彼方に遠慮もなくくれ竹のよのうきと云ふ事二人が中には葉末
 におく露ほども知らず笑ふて暮らす春の日もまだ風寒き二月半は梅見て来んと夕暮

- (1) 幼時よりすぐれている。
- (2) 花のように美しい姿。
- (3) 春の山。
- (4) 「待つ」と「松」をかけた。
- (5) 進まず止まりがちになる。
- (6) 未婚の娘の髪形で根が高い位置にある。
- (7) 目の細かい絞り染め。
- (8) 紅花。
- (9) 思いもよらぬ。
- (10) 風(たこ)。
- (11) 過ぎ去った昔の。
- (12) 言い合つてきまづくなる。
- (13) あどけなく。
- (14) 可愛く。
- (15) 袖をおさえて。
- (16) 山高帽子。高級官僚などが用いた礼装用の帽子。
- (17) 「世」にかかる枕詞。
- (18) 三面六臂で女神像に作られた神。下谷徳大寺のものか。
- (19) 江戸時代。恋慕から放火



図 2

や摩利支天の縁日に連ぬる袖も温かげに。良さんお約束のもの忘れては否よ。ア、大丈夫忘すれやアしなひ併しコーツと何んだッけねへ。あれだものを出かけにもあの位願つておいたのに。さう／＼おぼえて居る八百屋お七の機関が見たいと云つたんだッけ。アラ否嘘ばつかり。それぢやア丹波の国から生捕つた荒熊でございの方か。何うでもようございますよ妾は最早帰りますから。あやまつた／＼今のはみんな嘘何うして中村の令嬢千代子君とも云れる人がそんな御注文をなさらう筈がない良之助たしかに承はつて参つたものは。ようございます何も入りません。さう怒つてはこまる喧嘩しながら歩行と往来の人が笑ふぢやアないか。だつてあなたが彼様なこと許かしおつしやるんだもの。夫だからあやまつたと云ふぢやないかサア多舌て居るうちに小間物屋のまへは通りこして仕舞つた。あらマア何しませうねへ未だ先にもありますか知ら。何だかぞんじませんでしたつた今何も入らないと云つた人は何処に。最早それはいひツこなしとゝめるも云ふも一ト筋道横町の方に植木は多しこちへと招けば走りよるぬり下駄の音カラコロリ琴ひく盲女は今の世の朝顔か露のひぬまのあはれ／＼粟の水飴めしませとゆるく甘くいふ隣にあつ焼の塩せんべいかたきをむねとしたるもをかし。千代ちやん鳥渡見玉へ右から二番目のを。ハア彼の紅梅がいゝ事ねへと余念なく眺め入りし後より。中村さんと唐突に背中たゝかれてオヤと振り返れば束髪の一群何と見てかおむつまいこと無遠慮の一言たれが花の唇をもれし詞か跡は同音の笑ひ声夜風に残して走り行くを千代ちやん彼は何だ学

し火刑に処せられた女性。
(20) 視機関(のぞきからくり)。

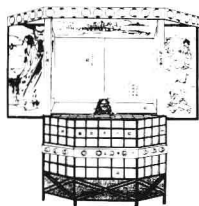


図3

(21) 「丹波…ござい」は、一人が顔を黒く塗って熊になり、もう一人がそれを連れ回す見せ物の口上。

(22) 盲目の女芸人。

(23) 浄瑠璃・歌舞伎の「朝顔日記」の主人公深雪。恋人を追って流浪の末盲目となり、歌を歌って宿場をさすらう。

(24) 深雪が歌う朝顔の歌。

(25) 第一とする。

(26) たわいなく。

(27) 明治の中頃に発案された西洋風に束ねる

髪形。



図4

校の御朋友か随分乱暴な連中だなアとあきれて見送る良之介より低頭くお千代は赧然めり⁽¹⁾

(中)

昨日は何方に宿りつる心とてかはかなく動き初めては中々にえも止まらずあやしや迷ふぬば玉の闇色なき声さへ身にしてみて思ひ出づるに身もふるはれぬ其人恋しくなると共に耻かしくつゝましく恐ろしくかく云はゞ笑はれんかく振舞はゞ厭はれんと仮初の返答さへはかしくしくは云ひも得せずひねる畳の塵よりぞ山ともつもる思ひの数々逢ひたし見たしなど陽はに云ひし昨日の心は浅かりける我が心我と咎むればお隣とも云はず良様とも云はず云はねばこそくるしけれ涙しなくばと云ひけんから衣胸のあたりの燃ゆべく覚えて夜はすがらに眠られず思に疲れてとろくすれ⁽¹¹⁾ば夢にも見ゆる其人の面影優しき手に背を撫でつゝ何を思ひ給ふぞとさしのぞかれ君様ゆゑと口元まで現の折の心ならひにいひも出でずしてうつむけば隠し給ふは隔てがまし大方は見えて知りぬ誰れゆゑの恋ぞうら山しと憎くや知らず顔のかこち言余の人恋ふるほどならば思ひに身の瘦せもせじ御覽せよやとさし出す手を軽く押へてにこやかにさらば誰をと問はるゝに答へんとすれば暁の鐘枕にひびきて覚むる外な

(1) 氣おくれして顔を赤らめた。

(2) 昨日までは、どこに恋心が宿っていたのだろうか。

(3) 頼りなく。

(4) 容易に静めることができない。

(5) 物の正体がわからず、いぶかしく。

(6) 「闇」にかかる枕詞。

(7) 氣まりが悪く。

(8) ほんのちよつとした。

(9) はきはきと。

(10) もじもじとむしるばかりの畳のけば。

(11) 自分の心がわが身を非難しているのて。

(12) 古今集「君こふる涙しなくばから衣むねのあたりは色もえなまし(紀貫之)」をふまえる。

(13) 夜じゆう。

(14) 目覚めている時。

(15) うらみ言。

き思ひ寐の夢鳥がねつらきはきぬく⁽¹⁷⁾の空のみかは惜しかりし名残に心地常ならず
 今朝は何とせし顔色わろしと尋ぬる母はその事さらに知るべきならねど面赤むも
 心苦し昼は手ずさびの針仕事にみだれその乱るゝ心縫ひとめて今は何事も思はじ
 思ひてなるべき恋かあらぬか云ひ出して爪はじきされなん恥かしきには再び合す顔
 もあらじ妹と思せばこそ隔てもなく愛し給ふなれ終のよるべと定めんにいかなる人
 をとか望み給ふらんそは又道理なり君様が妻と呼ばれん人姿は天が下の美を尽して
 糸竹 文芸備はりたるをこそならべて見たしと我すら思ふに御自身は尚なるべし及
 ぶまじきこと打出して年頃の中うとくもならば何とせん夫こそは悲しかるべきを思
 ふまじく他し心なく兄様と親しまんによも憎みはし給はじよそながらも優しきお
 詞きくばかりがせめてもぞといさぎよく断念めながら聞かず顔の涙 頬につたひて
 思案のより糸あとに戻どりぬさりとては其のおやさしきが恨みぞかし一向につらか
 らばさてもやまんを忘れぬは我身の罪か人の咎か思へば憎きは君様なりお声聞く
 もいや御姿見るもいや見れば聞けば増さる思ひによしなき胸をもこがすなる勿体な
 けれど何事まれお腹立ちて足踏ふつになさらずは我れも更らに参るまじ願ふもつら
 けれど火水ほど中わろくならばなか／＼に心安かるべしよし今日よりはお目にもか
 ららしものもいはしお気に障らばそれが本望ぞとて膝につきつめし曲尺ゆるめると
 共に隣の声を其の人と聞けば決心ゆら／＼として今までは何を思ひつる身ぞ逢ひた
 しの心一途になりぬさりながら心は心の外に友もなくて良之助が目に映るもの何の

(16) 鳥の声。

(17) 男女が共寝した翌朝。

(18) 手なぐさみ。

(19) 一生を共にする妻。

(20) 糸は琴や三味線、竹は笛や笙。すなわち、音楽のたしなみ。

(21) 言い出して。

(22) 浮わついた気持ちでなく。

(23) よもや。

(24) 聞かぬふりをしようと思つても流れる涙。

(25) 冷たくあたるならば。

(26) そのかがいがたい。

(27) 何事であろうと。

(28) まったく足を向けることをなさらないならば。

(29) ひとり心中に思うのみで。

色もあらず愛らしと思ふ外一点のにぎりなければ我恋ふ人世にありとも知らず知らねば憂きを分ちもせず面白きこと面白げなる男心の淡泊なるにさしむかひては何事のいはるべき後世つれなく我身うらめしく春はいづこそ花とも云はで垣根の若草おもひにもえぬ

(1) 恋情の影。

(2) 未来に望みはなく。

(下)

千代ちやん今日は少し快い方かへと二枚折の屏風押し明けて枕もとへ坐る良之助に乱だせし姿耻かしく起きかへらんとつく手もいたく瘦せたり。寝て居なくてはいけないなんの病中に失礼も何もあつたものぢやアないそれとも少し起きて見る気なら僕に寄りかゝつて居るがいと抱き起せば居直つて。良さん学校が御試験中だと申すではございませんか。ア、左様。それに妾の処へばつかし来て居らしやつてよろしいんですか。そんな事まで気にするには及ばない病気の為にわるいから。だつて何うもすみませんもの。すむのすまないのとそんなこと気にするより一日も早く癒くなつて呉れるがいと。御親切に有難うございますですが今度は所詮癒るまいと思ひます。又馬鹿なことを云ふよそんな弱い気だから病気がいつまでも癒りやアしない君が心細ひ事を云つて見たまへ御父さんやお母さんがどんなに心配するか知れ

(3) たいそう。

(4) じつと見つめる。

ません孝行な君にも似合はない。でも癒くなる筈がありませんものと果敢なげに云
 ひて打ちまもる睫に涙は溢れたり馬鹿な事をと口には云へどむづかしかるべしとは
 十指のさす処あはれや一日ばかりの程に瘦せも瘦せたり片靨あいらしかりし頬の肉
 いたく落ちて白きおもてはいと透き通る程に散りかかる幾筋の黒髪緑は元の緑な
 がら油けもなきいたくしよ我ならぬ人見るとても誰かは腸断えざらん限り
 なき心のみだれ忍艸小紋のなへたる衣きて薄くなるとのしごき帯前に結びたる姿
 今幾日見らるべきものぞ年頃日頃片時はなる間なく睦み合ひし中になど底の心
 知れざりけん少き胸に今日までの物思ひはそも幾何ぞ昨日の夕暮お福が涙ながら
 語るを聞けば熱つよき時はたえず我名を呼びたりとか病の元はお前様と云はるゝも
 道理なり知らざりし我恨めしくもらさぬ君も恨めしく今朝見舞ひしとき瘦せてゆる
 びし指輪ぬき取りてこれ形見とも見給はゞ嬉しとて心細げに打ち笑みたる其心今
 少し早く知らば斯くまでには衰へさせじをと我罪恐ろしく打まもれば。良さん今朝
 の指輪はめて下さいましたかと云ふ声の細さよ答へは胸にせまりて口へのぼらず無
 言にさし出す左の手を引き寄せてじつとばかり眺めしが。妾と思つて下さいと云ひ
 もあへずほろ／＼とこぼす涙其まゝ枕に俯伏しぬ。千代ちやんひどく不快でもなつ
 たのかい福や薬を飲まして呉れないか何うした大変顔色がわるくなつて来たおぼさ
 ん鳥渡と良の助けが声に驚かされて次の間に祈念をこらせし母も水初穂取りに流し
 元へ立ちしお福も狼狽敷枕元にあつまればお千代閉ぢたる目を開らき。良さんは。

(5) 多くの人の意見が一致するところ。

(6) 自分以外の人間。

(7) 悲しさに胸の張りさける思いをしない者がいるだろうが。

(8) 縮緬や羽二重などの布をしごいて結ぶ帯。寝る場合、前にしめる。



図5

(9) 長い年月の間、いつも。

(10) 心の底。

(11) ゆるくなった。

(12) 自称の人代名詞。武家などの女性がへりくだって用いた語。

(13) 神仏に供えるために、早朝一番にくんだ水。または、切火をして清めた水。

良りやうさんはお前の枕まくらもと元にそら右みぎの方ほうにおいでなさるよ。阿母おつかさん良りやうさんにお帰かへりを願ねがつて下さい。何故なぜですか僕ぼくが居ゐては不都合ふつがふですかエ居ゐてもわるひことはあるまい。福ふくやお前まへから良りやうさんにお帰かへりを願ねがつておくれ。貴嬢あなたは何なにをおつしやいます今いままで彼あれ程ほどお待遊まちあそばしたのに又またそんなことをエお心持こころもちがおわるひのならお薬くすりをめしあがれ阿母おつかさまですか阿母おつかさまはうしろに。こゝに居ゐるよお千代ちよや阿母おつかさんだよいゝかへ解わかつたかへお父ちちさんもお呼よび申まをしたよサアしつかりして薬くすりを一口おあがりエ胸むねがくしいア、さうだらう此このマア汗あせを福ふくやいそいでお医師いしやさま様さまへお父ちちさんそこに立たつて入いらつしやらないで何なにうかしてやつて下さい良りやうさん鳥渡ちうぶつ其そのの手拭てぬぐひを何なにだとエ良りやうさんに失礼しつれいだがお帰かへり遊あそばしていたゞきたいとあゝさう申まをすよ良りやうさんおきゝの通とほりですからとあはれや母ははは身みも狂きやうするばかり娘むすめは一語一語呼吸こゝろをせまりて見るゝ顔色かほいろ青あおみ行くは露つゆの玉たまの緒いと今宵けいよはよもと思おもふに良りやう之助のすけ起たつべき心こゝろはさらにもなけれど臨終らいしゆうに迄までも心こゝろづかひさせんことこのいとをしめて屏風びやうぶの外ほかに二足ふたあしばかり糸いとより細こまき声こゑに良りやうさんと呼よび止とめられて何なにぞと振り返かへれば。お詫わびは明日あした。風かぜもなき軒端のきばの桜さくらほろゝとこぼれて夕ゆふやみの空鐘かかねの音ねかなし

(明治25年3月「武威野」)

(1) 露のようにはかない命。

(2) とても今宵は持つまいと。

うもれ木

第一回

描き出だすや一穂の筆さき(1)に、五百羅漢(2)十六善神(3)、空に楼閣をかまへ、思ひを廻廊にめぐらし、三寸の香炉(4)五寸の花(5)瓶に、大和人物漢人物、元禄風の雅なるもあれば、神代様うづたかく、武者の鎧のおどしを工夫し、殿上人に装束の模様を撰らみ、或は帯書(6)きに華麗をつくす花鳥風月、さては楚を極むる高山流水、意の趣く処景色ととのひて、濃淡よそほひなす彩色の妙、砂子打ちを築と見る素人目に、あつと驚

(1) 釈迦の弟子である五百人の聖者。

(2) 般若経とその受持者を守護する十二神将と四大天王の総称。

(3) 神代の人物。

(4) 糸や皮でつづつた鎧の札(さね)。

(5) 花瓶や花生けの首または胴に帯状に描かれた模様。

(6) 美しいさま。

(7) 点を集めて盛り上げるように図柄を描くこと。

歎さるゝほど、我れ自身おもしろからず、筆さしおきて屢々なげく斯道の衰頽、あはれ薩摩といへば鯉節さへ幅のきく世に、さりととは地に落ちたり我が錦襪陶器、おもひ起す天保の昔し、苗代川の陶工朴正官、其地に錦様の工みなきを敷じ、歳十六の少年の身に、奮ひ起す勇氣千万丈、奉行を説き藩庁に請ひ、堅野に二人の教授をむかへて、相伝法受の苦を尽くしつ、猶心胆をねる幾春秋、安政のはじめ田の浦の陶場に、焼着画窯の良結果を奏するまで、刻苦艱難いくばくぞや、夫れが流れて浴する身の、美術奨励の今日うまれ合はせながら、此処東京の地にはかり二百に余る画工のうち、天晴道の奥を極めて、萬里海外の青眼玉に、日本固有の技芸の妙見せつけくれんの腸もつものなく、手に筆は取り習らへど、心は小利小欲のかたまり、美とは何ぞ儲け口か、乃至吉原洲崎のちりからたつぼう、品川にも又捨てられぬ代物ありと、口三味線の筆拍子に、なぐり書きしての自慢顔、兎角は金の世の中に、優でござるの妙で候のと言ふ処が、結局は仕切り直段の上にあること、問屋うけの宜き物一致あり難しとは、そも何方より出る詞ぞ、さればこそ売国の奸商どもに左右されて、又も直下げ又も直下げと、さらでもの瘦せ腕ねぢられながら、無明の夢まだ覚めもせず、是れでは合はぬの割仕事に、時間を厭ひ費用を減じて、十を以て一に更ふる粗画濫筆、まだ昨日今日絵の具台に据りて、稽古は居ねぶりの白雲頭を、張りこかして手伝はする淵がき腰がきの模様、霞砂子みだれ砂子の乱れ書きに、美といふ字は拭ひさる絵のぐ雑巾の汚れ同様、さりととは雪がれぬ恥ならずや、

(1) この道。

(2) 薩摩と長州出身の政治家が権力をふるっていた時代で、鯉節も薩摩の名産であった。

(3) 色絵に金彩を加えた華美な陶磁器。こゝでは薩摩焼。

(4) 薩摩焼の窯場の一つ。

(5) 幕末から明治初年にかけて腕をふるった名陶工。

(6) 錦手多彩な絵付けをした陶磁器の陶工。

(7) 薩摩藩の御用窯であった堅野窯。

(8) 薩摩藩庁の窯場があった。

(9) 上絵付け用の窯。

(10) 根性を持つ者。

(11) (13) 吉原、洲崎、品川は当時の東京の代表的な遊廓。

(12) 遊里の騒ぎ唄やその囃子。

(14) 売買の成立した値段。

(15) 一番ありがたい。

(16) 悪徳商人。

(17) 真実の見えない状態からいまだにぬけたせない。

(18) 問屋から割り当てられた下請け仕事。